大和三田会 会報

No.6

2013年12月

Keio University

CALAMVS GLADIO FORTIOR

1858

目次

1) 平成25年大和三田会×新年会

2) 第6回大和三田会総会

3) 自由投稿

「慶應義塾武蔵小金井寮の想い出」新田義孝

「日吉の丘　自由な風に乗って」太田善夫

「小田急江ノ島線の開通と林間都市計画」

（特別掲載：大和市つる舞の里歴史資料館）

4) おしらせ

平成 25 年大和三田会・新年会

大和三田会の新年会が、平成 25 年 1 月 12 日（土）、中央林間の「欧風台所ラ・パレット」にて開催されました。今年も大和三田会会員、会員のご家族、友人、ゲストあわせて、約 50 名の多くの方々にご参加いただき、盛大な新年会となりました。

清水麻帆幹事（平成 9 年法学部卒）の司会により、新年会がスタートしました。最初に、井上勝彦副会長（昭和 36 年経済学部卒）より開会のご挨拶があり、続いて吉村満幹事（昭和 48 年法学部卒）の指揮、石井一夫幹事（昭和 49 年文学部卒）のピアノ伴奏で、参加者全員で慶應義塾塾歌を斉唱しました。

太田滋大和三田会会長（昭和 23 年工学部卒）による会長挨拶があり、冨澤篤紘顧問（昭和 38 年法学部卒）の御発声による乾杯が行われました。古木通夫幹事長（昭和 44 年経済学部卒）から新入会員、ゲストの紹介がありました。甘利明顧問（昭和 47 年法学部卒）も駆け付けられ、ご挨拶がありました。

ラ・パレットの美味しい食事や、ワインに舌鼓を打ちながら、参加者全員、塾生時代の思い出話に花を咲かせました。清水幹事の名司会のもと、伊藤祐介サポーター（平成 12 年文学部卒）、荻須博江サポーター（平成 16 年経済学部卒）、椎木空海サポーター（平成 20 年政策・メディア研究科卒）もお手伝いに加わり、恒例の大抽選会も開催されました。豪華な景品の抽選発表に、周囲の祝福を受け、参加者は喜んでいらっしゃいました。

新年会も終盤を迎え、参加者一同肩を組んで、慶應カレッジソングの大合唱「丘の上」「慶應賛歌」「若き血」が、室内に響きわたりました。さらに大日方健会員（平成 10 年商学部卒）のエールの声に会場の興奮は最高潮に達しました。

最後に、石塚雅男副会長（昭和 40 年経済学部卒）による中締めのご挨拶があり、会員全員の健康、活躍を誓い、新年会は盛会のうちに閉会しました。

平成 26 年の新年会は、平成 26 年 1 月 11 日（土）午後 6 時、中央林間「欧風台所 ラ・パレット」にて開催の予定です。皆様、是非ご参加いただき、楽しいひと時をご一緒致しましょう！ご参加をお待ちしております。

第 6 回大和三田会総会

大和三田会第 6 回総会及び懇親会が、平成 25 年 6 月 8 日（土）、横浜うかい亭を会場として、多くの会員・家族の方の参加をいただき盛会に開催されました。総会は例年のごとく清水麻帆会員（平成 9 年法学部卒）の司会のもと、初めに太田滋会長（昭和 23 年工学部卒）から開会のご挨拶をいただき、議案の審議に入りました。

大和三田会会長 太田 滋

本日は大変お忙しいところ、大和三田会の第 6 回総会あたり、斯くも多数の塾員諸君のご出席を戴き、誠に有り難く厚く御礼申し上げます。

本会は平成 20 年の慶應義塾創立 150 周年にあたり、我が大和市において地元の有力塾員諸氏の御尽力のお陰で、平成 20 年 10 月に発足しましてから早くも 5 年に相成りました。その間、順調な発展を遂げ、本日ここに目出度く第 6 回目の総会を迎えることができましたことは、御同慶至極に存じます。塾員相互の親睦をはかり、より良い三田会であるためには、如何にあるべきか皆様のご意見をいただけますよう、お願い致します。

本日は有り難うございました。皆さまの更なる御健闘をお祈り致します。

第 1 部・総会の議事内容については次のとおりで、原案通り承認されました。なお、事業計画案について事業委員会より、今年度は、市の施設である茶室の慈緑庵でのお茶の飲み方教室の開催や福沢諭吉生誕の地（大分県中津市）の訪問等を検討していることが報告されました。

1. 平成 24 年度事業報告
2. 平成 24 年度会計報告
3. 役員補充の件
4. 平成 25 年度事業計画（案）
5. 平成 25 年度予算計画（案）

第 2 部では、市のつる舞の里歴史資料館職員から、「小田急江ノ島線の開通と林間都市計画」と題して林間都市の変遷についての興味深いご講演をいただきました。

今回、つる舞の里歴史資料館のご厚意により、講演資料転載の許可をいただきました。「自由投稿」コーナーに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

ご講演の後、参加者全員で記念撮影を行いました。

第３部では、総会・講演・集合写真撮影に引き続き例年どおり清水麻帆会員（平成９年法学部卒）の司会のもと懇親会がスタートしました。

最初に、吉村満会員（昭和４８年法学部卒）の指揮、石井一夫会員（昭和４９年文学部卒）のピアノ伴奏に合わせ、荘厳に慶應義塾塾歌を斉唱しました。

その後、石塚雅男副会長（昭和４０年経済学部卒）から挨拶があり、続いて来賓紹介と、来賓を代表して早稲田大学大和稲門会の真鍋氏、および日本大学桜門会の安藤氏からそれぞれお祝いのご挨拶をいただきました。

続いて、大和三田会顧問 冨澤篤紘会員（昭和３８年法学部卒）の発声による乾杯と大和三田会顧問 甘利明会員（昭和４７年法学部卒）からの祝電披露があり、歓談に入りました。

その後、上泰司（カミ ヤスシ）氏、 本名：上領泰司（カミリョウ ヤスシ）（昭和４４年法学部卒）氏による演歌があり、「夫婦桜」と「ああ、雨の夜」の２曲が披露され、その歌声に参加者は聞き入っていました。

しばらく歓談した後、参加者全員で「丘の上」、「慶應讃歌」、「若き血」等の思い出深い歌を熱唱しました。吉村さんの指揮、石井さんのピアノ伴奏により皆で円陣を組み歌い、会場の雰囲気は最高潮に達しました。

その後、冨澤篤紘会員（昭和３８年法学部卒）によるエールが行われました。

楽しく盛り上がった懇親会も、終了の時を迎え、井上勝彦副会長（昭和３６年経済学部卒）による中締めのご挨拶があり、懇親会は盛況のうちに閉会となりました。

自由投稿

自由投稿のコーナーでは、皆様からの投稿もお待ちしております。

慶應義塾武蔵小金井寮の想い出

新田義孝　工学部　昭和 43 年卒業

貧乏学生だったので、工学部２年生から修士１年生までの４年間を、小金井寮で過ごした。慶應と言えども一年先輩は先輩、いわゆる‘ｘｘさん’と呼ばねばならない上下関係。毎月コンパ。大昔の蛇の目ミシンの寮だった木造二階建て。十二畳半の畳敷きの部屋に 4，3，２年生が一人ずつ配置され生活する。毎年入れ替え。

正直、部活動などをしてこなかっただけに、人間関係には我慢の連続であった。親しい友人と市立図書館に行って数時間を過ごしたり、近くの小金井公園まで散策し青春を語り合ったり。面白かったのは春と秋に行われる女子大の寮との合コン・バスツアー。津田塾大学、日本女子大との合コンではカップルが出来、卒業後結婚した先輩や同期がいた。津田塾大学白梅寮の寮生たち約 10 名が寒い冬の日に突然押し掛けてきて、数人ずつ各部屋に分散して七輪で鍋をつついたこともあった。

正直、三田の学生には勉学に勤しんでいる人は皆無だった。とんでもない寮に入ったものだと、忸怩たる思いをずっとしていた。昼ごろ起き出して、麻雀。夜は飲み歩いている経済や法学部、文学部の学生たち。こういう人たちは惨めな将来を迎えるのだろうなぁと思っていた。

ところが、筆者が還暦を過ぎたころから小金井寮卒業生の集いが毎年のように開かれるようになり、会場の銀座 BRB に行ってみると、人生って面白いものだなぁと感激してしまう。小金井寮の想い出と、その後の人生を各自が披露しあうのだが、同じ場所で青春を過ごした人たちがこんなに違う人生を歩み、それぞれが大きな足跡を残してきたのかと、まさに感嘆のひと時。某有名ホテルの支配人、某大手旅行社の専務、いや役職ばかりでなく、シカゴに赴任したときに地元の子供たちに柔道を通じて日本文化を教えていたら、なんと自分は日立の駐在員だったのに、東芝に行った同じ研究室の同級生とそこで再会して二人で指導したとか……。

人生に大成する人とは？そういう問いを、60 代後半でも NHK でプロデューサーを務めている現役従弟にぶつけてみた。そうしたら‘偉くなりたいという欲’がキーワードではないかという。‘偉くなる’とは奥深い言葉であって、小物がエラそうにふるまうことではもちろんない。大きな仕事をしたいとか、大きな責任ある立場にたって社会に自分しかできないコンセプトを示して率先垂範で社会に貢献したいとか、あるいは右も左もわからない若者たちに生きることへの挑戦意欲を沸かせる等々あるだろう。そうしたことを‘したい！’と思うことが‘偉くなりたい’という欲なんだろうと思う。

筆者が 37 年勤務した財団にも'偉くなりたい'人たちが少なからずいた。ある人は研究成果で世の中を動かしたいと有名大学の教授へと巣立っていったし、ある人は財団のなかで高い地位につこうと（筆者にはそう見えた）若い部下に一生懸命チャンスを与え、良い仕事をするように導いていた。結果、彼は生え抜きの専務理事第一号になった。自分で仕事をするより、意欲に燃えた部下たちに活躍のインセンティブと機会を与えたことで財団の研究成果に大きく貢献した人だった。

今、地方の小さな大学で第二の人生 16 年目を過ごしているが、預かっている学生諸君の中には在学中に心に火がつき、その意欲が実力そして実績へと展開した事例を挙げるのに苦労しない。京都大学の大学院を経て、大手銀行のシンクタンクからロンドンの世界トップの経済学大学院に派遣されたと思いきや、OECD の国家公務員に就任という、彗星のような卒業生がいる。あるいは大学卒業して豪州のクィーンズランド大学大学院に学び、帰国して電力会社が輸入する燃料の貿易に携わっている者もいる。授業料や滞在費はすべてアルバイトで稼いだ強者だ。誰でも入学できるような地方の小さな大学にも、心に火が灯れば'欲'に目覚める若者がいる。

先日、東大野球部を元巨人の桑田投手がコーチしていることを報じた TV 番組を見た。負けて悔しいと思わない。長時間練習すれば強くなれると信じている。そうした部員たちに「単に練習すれば強くなれると思うのか？考えろよ！」と強く言うコーチの姿が印象的だった。

慶應義塾大学武蔵小金井寮は、学生たちに'欲'を与えた。切磋琢磨して、一見遊びほうけている学生たちの心の中で、'欲'が育っていた。まじめな工学部の学生たちの方が、あそび呆けていた三田の学生より、単純平凡な人生を歩んだのかも知れない。

日吉の丘　自由な風に乗って

太田善夫　　法学部　昭和 60 年卒業

日吉駅から銀杏並木のなだらかな坂道をのぼり、正面に日吉記念館を見ながら右手に向かうと、白亜の慶應義塾高等学校の校舎がある。三田会等で日吉キャンパスに行く機会があると、何故か塾高の校舎へ足を向けたい気持ちに駆られる。

私は、1978 年 4 月、埼玉県浦和の公立中学校から塾高に入学した。入試の面接で、試験官から「家から遠いけど通えるのか？」と不安気に訊かれたが、「大丈夫です、通います。」と答え、三年間自宅を毎朝 6 時半に出て通学した。さすがに埼玉県から塾高に通学する生徒は極めて少なく、一学年 19 クラス 800 名、全校 2400 人というマンモス校の中で、埼玉から通学している生徒は、全部で数人に過ぎなかった。しかし、塾高での三年間は、すべてが楽しく刺激的で、数多くの素敵な友達と出会い、片道 1

時間半の通学は、少しも苦にならなかった。十代後半の多感な時代に、自由闊達な環境にどっぷりと浸かり、高校生活を送れたことは大変幸せだったと思う。

塾高のあと、大学の法学部法律学科に進み、通算７年間、日吉と三田で塾生生活を送った。塾高は、準大学的な自由闊達な雰囲気にあふれ、キャンパスも大学と一緒だったため、大学生活を７年間謳歌させてもらったようなものだと思っている。

公立中学からの入学生にとっては、塾高は全てが驚くことばかりであった。

わたしの入った１年Ｇ組は、47名。そのうち、留年生が３名。各クラスに留年がゴロゴロ。わたしの隣の席は、既に二留(普通部で一年留年、塾高で一年留年)のＡさん。新入生とは全く異なる大人の存在にとても驚いた。

彼は、幼稚舎出身で塾高応援指導部の旗手長、そして遊び人。放課後のフィールドは六本木。リーダーシップのある親分肌で、温和で思いやりもあり、校内で一目置かれる存在だった。わたしもずいぶんかわいがってもらい、慶応ボーイのエッセンスについて自然と影響を受けたと思う。

塾高の進級基準はとても厳しく、全科目の平均点で原則6.0点以上(10点満点)を取ることが必要。実態的には、5.5 点位が及第のラインだったが、毎年各学年 30～40人位落第していた。大学と同様に、二回連続で落第すれば、例外なく退学。Ａさんも２年に進級できず、残念ながら、放校になってしまう。体育会でどんなに業績を挙げ活躍しようが、先祖代々慶應社中の中枢サラブレットであろうが、親がどれほど塾に寄付していようが、関係ない厳しさであった。こうした学問に対しての厳しさと公平、公正さは、自由と裏腹であり、福沢先生の精神そのものだったと思う。

大学での留年は珍しくないが、高校でこれほど進級に厳しい学校は稀有だったに違いない。校則もほとんど存在せず、自由を徹底する反面の、自己責任の厳しさであった。なお、私は、幸か不幸か三年で塾高を卒業した。

自由闊達な校風と年齢の違う留年生の存在が相まって、塾高の多様性や、独特の文化を形成していたと思う。

大学受験がないこともあるが、とにかく自由放任。校則といえば、自動車、オートバイでの登校禁止、喫煙禁止位なもので、法に触れることでなければ何をやっても自由という環境だった。塾高生の中では、成績が良いとか、勉強ができるということは、評価の枠外。生徒の関心は、いかに女の子にモテるかとか、いかに遊びに長けているか、新しい音楽やファッション、スポーツに通じていることが重要視されていた。確かに、塾高は当時の若者の流行や風俗の最先端の発信基地でもあったことは事実。塾高で先ず流行ったものが、ポパイ等の雑誌により紹介されて、広まったものも多い(デッキシューズ、正ちゃん帽・・・)。

勉強だけして成績が良いだけの生徒は、最も軽蔑されていたように思う。尤も、勉強だけの生徒に限って、たいして成績も良くなかった記憶も・・・。

授業内容も各教師の自由裁量に任され、指導要領や教科書とは関係なく、教師が自由に一つのテーマに絞り、掘り下げて生徒に考えさせる授業が多かった。例えば、日本史は平安時代の荘園制度についてのみ。現代国語は小林秀雄の一篇のエッセーを徹底的に読み解く、といった具合。大学の講義のような授業が多く、レポート提出を求められることも多く、教科書や参考書もなく、模範回答もない授業にかなり戸惑い、苦労した。しかし、自分で問題を見つけて考察し、自分なりの解答を見出すという過程は、知的作業の楽しさを教えてくれたと感謝している。

塾高の自由さとマンモス校ゆえの匿名性は、ひとり一人の生徒にとって、自分の存在意義、居場所を自ら見つける必要性を感じさせた。私は、通学に時間がかかったので、体育会には入らず、新聞会に所属し、「ザ・ハイスクールニューズ」という学校新聞の編集に携わった。高校の学校新聞とはいえ、活版印刷で 4～8 頁のちょっとした夕刊紙程度の新聞を年 4～5 回、4000 部発行していた。学校内のニュースのほかに、硬派面としては、社会問題も扱い、原子力問題も特集した記憶がある。一方、軟派系の記事として、聖心やフェリス、雙葉…といった女子高校を訪問し、レポート記事を掲載したりしていた。なお、軟派系の記事は、読者生徒から特に人気があった。

また、OB へのインタビュー訪問なども行い、記事にした。ある号で、憧れの加山雄三さんを訪問した。当時の同氏は 40 歳位。日に焼けてがっちりした体躯でとても格好良かった。ご子息が幼稚舎に入学されたころでもあり、慶応の良さを熱く語っていた。「慶応は、お坊ちゃんとか揶揄されることもあるけど、お坊ちゃんでいいんだよ。立派なものだ。社会に出ると色々な人間がいるし、様々な人間関係があるが、慶応出身の人間とは安心して付き合える。自分は塾高に行くか日比谷高に行くか迷って慶応に入ったが、とても良かったと思っている。東大のほうが多少優秀かもしれないが、慶応は日本一の学校だと思っている。」と熱く語っていたのを思い出す。

「ザ・ハイスクールニューズ」の発行費用は、生徒会予算から割り当てられていたのだが、私が三年の時に、新聞会で映画も作ろうということになり、広告集めをすることになった。クラブとして初めての試みであったため、先ずは銀座の慶応 OB の店に行ってみようということで、三田評論の社中交歓への寄稿記事を手掛かりに、部員二人で銀座のてんぷらや「橋善」に飛び込んだ。来訪理由を店の女性に伝えたところ、帳場に案内され、若旦那が対応してくれた。幼稚舎から塾の方で、もちろん塾高出身であり、趣旨を説明すると、即座に快諾され、大変応援をしていただいた。更には、銀座界隈の塾員のお店も沢山紹介していただいた。予想外の展開に戸惑いながらも、そのあと、紹介されたハゲ天、天国、三笠会館…を訪問し、同様に快く協力していただいた。初対面の後輩を温かく迎えていただき、応援していただいたことを、今でも

心から感謝している。社会人になり、時々お店を利用させていただいたが、残念なことに、橋善は 10 年位前に閉店し、今はない。当時お世話になった塾員の銀座のお店には、感謝も込めてできるだけ足を運びたいと思っている。

そのほか、新聞会の活動を通じて、当時たくさんの先輩にお会いする機会が持てた。多くの素敵な先輩諸氏の謦咳に接する機会を得られたことは、大変幸せだったと思う。これも自由な塾風のおかげである。塾の先輩、後輩のつながりは、私自身もこれからも大切にしていきたい。

そして、自由な塾風と、福沢精神を大切な核にしながら、大和三田会の絆をしっかりと育み、発展させていきたいと思う。

小田急江ノ島線の開通と林間都市計画

(特別掲載：大和市つる舞の里歴史資料館)

鉄道と近代化～小田急江ノ嘉線の潤通～

小田原急行鉄道株式会社(以下、小田急)は、昭和 2 年(1927)の小田原線新宿～小田原間の開通に続いて、同 4 年(1929)に江ノ島線相模大野信号所～片瀬江ノ島間を開通させました。大和市域には、「中央林間都市(現・中央林間)」「南林間都市(現・中央林間)」「鶴間」「西大和(現・大和)」「高座渋谷」の 5 駅が開設されました。

小田急江ノ島線が開通した時期は第三次私鉄ブームといわれた時代で、大正 10 年(1921)から昭和 5 年(1930)の 10 年間に新規開業した鉄道は 142 社にものぼります。小田急小田原線が交通の便に恵まれなかった湘北の既存小都市を結びつつ、箱根への観光路線を目指したのと同じように、江ノ島線は古い村落が点在していた当時の相模野を南北に縦貫し、その開発を促すとともに、湘南の名勝江の島と都心を結ぶ観光路線としての発展を期待されました。

江ノ島線は当初から全線複線電化路線として建設されました。開業当初は新宿～片瀬江ノ島間に一日 16 往復の直通列車が走り、両駅間の所要時間は 93 分でした。また、旅客運賃は新宿～中央林間都市開で 67 銭、新宿～南林間都市間で 69 銭でした。

林間に都市を～林間都市計画～

小田急の創立者である利光鶴松(とししみつつるまつ)は、江ノ島線の敷設と並行して、当時、一面の雑木林であった沿線の大和村・大野村・座間村に約 100 万坪の土地を確保し、そこに住宅地・工業地・遊園地を含む一大都市を建設する「林間都市計画」を構想します。市域の中央林間・南林間地区は住宅地として計画されました。利光鶴松は、林間都市への首都移転をも考えていたといい、壮大な規模の計画であったこと

がうかがえます。

この構想に沿線住民も賛同し、長谷川彦太郎・古木民蔵・高下才介らの地元有志が中心となって、小田急との用地買収交渉に応じました。また、立木の伐採や道路の敷設にも、地元有志は積極的に関与しています。このような沿線住民の協力的な姿勢からは、鉄道・都市開発に対する期待が大きかったことがうかがえます。

江ノ島線が開通した当時の市域は、まだ相模野の自然をよく残しており、中央林間のすすきの原、南林間の松林などの向こうに丹沢山塊を望む閑静な場所でした。分譲初期は人家もまばらで、電気もなく夜はランプをともす生活でした。とくに困ったのが水で、20メートル以上も井戸を掘ってポンプで汲み上げなければなりませんでした。人々は、開通したての鉄道とともに、相模野の自然の中に一から街を作りあげていくこととなります。

文化都市を目指して～林間都市を彩る文化の息吹～

林間都市計画では、宅地の分譲だけなく、教育施設・娯楽施設が整備された文化都市を目指しました。南林間では昭和４年(1929)の江ノ島線開通と同時に、小田急初代社長手利光鶴松の長女・伊東静江により、カトリック精神を教育の基本に置く女子の中等教育機関として大和学園(現聖セシリア学園)が設立されました。また、昭和６年(1931)には、中央林間と南林間の間に、４面の野球場・ラグビー場・テニスコートやクラブハウスなどを備えた総面積２万７千坪の総合グラウンドが整備され、沿線野球大会や都心の大学の合宿などで賑わいを見せます。

スポーツ施設の集中するこの一帯は「スポーツ都市」と銘打って分譲されました。その分譲には雑誌『ベースボール』の発行に携わっていた鷲澤與四二(わしざわよしじ・代議士、実業家、慶應大学野球部を育てる)・田中清隆(画家)らが協力し、「スポーツ都市建設協会」という団体をつくって分譲地の宣伝が行われました。

他にも、小田急の後援のもと、昭和６年(1931)に相模カンツリー倶楽部が設立されています。また、中途で挫折はしましたが、松竹の映画撮影所の誘致、相撲力士養成所の建設などもおこなわれており、一大文化都市を標携した関係者の意気込みを見ることができます。

これらの施設のほかに、この地に移住してきた文化人たちも文化の重要な担い手としてあげることができます。スバル派の歌人であり劇作家の吉井勇、俳人であり俳文学者の高木蒼吾、哲学者で文芸評論家の唐木順三、小説家でサボテン研究家としても有名な龍膽寺雄などを代表的な人物として挙げることができます。これらの文化人は、下鶴間を舞台にした句会である細流吟場(さいりゅうぎんじよう)での交流に見られるように地元住民との関わりを持ち、市域における文化の輸の拡がりに影響を与えました。

林間の地に整備されたこれらの施設とそこに住む人々が契機となって、市域にはそれまでにない都市文化がもたらされたのです。

都市の名前がなくなって～林間都市計画の挫折と戦後の発展～

林間都市では、昭和４年(1929)11 月から同６年(1931)5 月にかけて、南林関西地区(約 22 万４千坪)、南林関東地区(約５万坪)、中央林間地区(約 21 万４千坪)の分譲が行われました。しかし、潜入後の解約者も相当に多く、分譲地の販売数はなかなか伸びませんでした。分譲開始から 10 年たった昭和 14 年(1939)8 月の時点での販売実績は南林間・中央林間両地区で約 15 万坪と全体の約 31%にとどまっており、初期の構想からすれば不本意な実績となっています。

この大きな原因として、長引く不況と、それに続く戦争があげられます。関東大震災・金融恐慌・昭和恐慌などで苦境に陥っていた日本経済は、その後戦時色の強い国家統制経済へと移行していきます。結局、昭和 16 年(1941)になって駅名から「都市」の名称がはずされ、林間都市計画は事実上ここで挫折してしまったのです。

昭和 30 年代半ばから 50 年代はじめにかけての市域への人口流入期になると、林間地区も人口が増加し、昭和 59 年(1984)に東急田園都市線が中央林間まで延伸されると開発は一気に加速しました。道路・駅前広場・学園やゴルフ場など、昭和初期の理想都市建設の遺産の上に築かれた街は、今こそ「都市」という名にふさわしい賑わいを見せています。現在でも格子状に整えられた街並みや放射状の道路などに、往時の林間都市の面影をみることができます。

*本稿は、平成 20 年度企画展「幻の林間都市雑木林 1:11 置かれた夢の一大都市」パンフレットの内容を一部手直し、作成しました。

主な参考文献

「小田急五十年史」(小田急電鉄株式会社, 1980) / 「大和市史３通史編近現代 J(大和市, 2002) / 「大和市史６資料編近現代下」(大和市, 2002) / 「大和市史研究」(大和市,「8 号 1982」・「12 号 1986」・「14 号 1988」)

おしらせ

Facebook「大和三田会」ページのおしらせ

新田義孝会員（昭和 43 年工学部卒）の主催で、Facebook に大和三田会のページができました。メンバーとしてご登録いただくと、メンバー間で情報交換やお便りの交換ができます。ぜひご参加ください。

登録希望の方は、新田義孝会員（dr.nitta@jcom.home.ne.jp）までメールにてご連絡ください。Facebook 上の URL は、下記の通りです。

https://www.facebook.com/groups/503664693031288

ゴルフ同好会参加のお誘い

ゴルフ同好会参加者を募集します。ワイワイガヤガヤ楽しくゴルフを楽しんでいます。スコアは気にせず、ぜひ参加してみて下さい。
コンペは春・秋の年２回。ご参加の際は会員家族・恋人・友人の同伴も歓迎します。
参加ご希望の方は、土橋篤会員（昭和 50 年工学部卒）迄メールまたは FAX で、ご連絡下さい。参加希望者は、コンペ当日の連絡のため携帯電話番号をお知らせ下さい。

土橋会員 連絡先
メールアドレス：atsushi.tsuchihashi@gmail.com
FAX：046-276-6672

大和三田会親睦ゴルフ大会 結果報告

第７回 大和三田会親睦ゴルフ大会 結果報告

日時：　2013 年 3 月 27 日
場所：　大厚木カントリー
参加人数：　15 名参加
優勝：　富沢 篤紘会員（昭和 38 年法学部卒）

第８回 大和三田会親睦ゴルフ大会 結果報告

日時：　2013 年 10 月 30 日
場所：　小田急藤沢ゴルフクラブ
参加人数：　12 名参加
優勝：　土橋 篤会員（昭和 50 年工学部卒）

第２回 バスツアー「新春　深川七福神巡りと福沢諭吉開塾の地を訪ねて」

2013 年 2 月 10 日（日）晴天に恵まれたさわやかな天候のもと、今年で 2 回目を迎えたバスツアーが実施されました。当日は、20 名の参加で、中央林間駅前を出発。最初の目的地である義塾発祥の地を訪ねました。付近には聖路加病院や中央区の公共施設等ビルが林立しており、当時の状況に思いを巡らすことは困難でしたが、歴史の変遷に感動させられました。

続いて、富岡八幡宮（恵比寿神）を皮切りに、深川七福神を順次訪問しました。富岡八幡宮には日本一の大神輿が収納展示されており、また横綱の碑、伊能忠敬の像などがありました。昼食は同宮境内にある「深川宿」で、深川めしを食しました。その後、心行寺等七福神を順に参拝し、1 年が良い年になるよう願いをこめました。帰りがけ、長命寺の桜餅とお茶をいただき帰路につきました。

原稿募集のおしらせ

大和三田会会報委員会では、会報に掲載する原稿を募集しています。

塾生時代の思い出

皆様の塾生時代の思い出についてご寄稿ください。（800～1600 文字程度）

自由投稿

随筆、紀行文、短歌、俳句、詩、その他ご自由なテーマでの執筆をお待ちしております。（400～6000 文字程度）

応募方法

投稿をご希望の方は、株式会社古木企画内 大和三田会事務局または会報委員長吉村満会員（昭和 48 年法学部卒）迄メールでご連絡ください。

連絡先

大和三田会事務局：f-kikaku-m@jcom.home.ne.jp

大和三田会会報委員長 吉村 満：manyoshi@jcom.home.ne.jp

今後の活動

平成 26 年新年会のご案内

下記の通り、平成 26 年新年会を開催いたします。ご参加の可否につきましては、別紙ご案内をご覧ください。
なお、ご家族の方々のご参加も歓迎いたします。

開催日時	平成 26 年 1 月 11 日（土）
開催場所	欧風台所 ラ・パレット（中央林間）
お問い合わせ先 及び返信先 （幹事長宛）	〒242-0007　大和市中央林間 4-27-18 株式会社古木企画 内 電話：046-276-5228　FAX：046-273-7155 メール：f-kikaku-m@jcom.home.ne.jp

第 7 回 大和三田会総会

日時：平成 26 年 6 月 14 日（土）
場所：横浜うかい亭

大和三田会